

ホイットマンと「父」のイメージ

—ホイットマン評述史の一側面—

田 中 礼

アメリカ文学の二つの傾向を示すのに、「ペール・フェイス」(paleface)と「レッド・スキン」(redskin)ということが言われる。言うまでもなくフィリップ・ラーヴ (Philip Rahv) の言であるが、ペール・フェイスの方は、ヨーロッパやイギリス文学の伝統を重視し、どちらかというと教養派、書斎派とも言うべきものであり、これに対してレッド・スキンの方は、アメリカのネイティブな要素や大地を重視し、野外とか行動を尊重するといふ。

もちろん、ラーヴ自身も認めるように、詩人や作家の内面はこの二要素をさまざま割合で含むものであろうが、それにも拘らずこの分類は、たしかにアメリカ文学の二潮流の存在を示し得ている。ホイットマン (Walt Whitman, 1819-92) 評述史の中で随所にペール・フェイスとレッド・スキンの葛藤が見られるのは興味深い。本稿ではその中でとりわけ、モダニズムの巨匠エズラ・パウンド (Ezra Pound, 1885-1972) と、ビート・ジェネレーションの代表者アレン・ギンズバーグ (Allen Ginsberg, 1926-) のホイットマン評価を基本にすえながら、併せてマイノリティ・グループのホイットマン評価にも話を進めたい。その際、彼らのホイットマン評価

の何れにも、ホイットマンに対して「父」という語が使われていることを重視したい。

まずエズラ・パウンドは、幼時からフィラデルフィアで育ち、大学院はペンシルヴァニア大学で学んだ。フィラデルフィアの郊外キャムデンは、ホイットマンが晩年住んだ所であり、そこにホイットマンの墓がある。パウンドはフィラデルフィアでホイットマンのことをきいていた。パウンドがイギリスへ渡る以前に、ホイットマンをある面で身近なものに感じていたということはあり得よう。

パウンドは二十四歳の時、ロンドンで“*What I Feel About Walt Whitman*” (1909) というエッセイを書き、また“*A Pact*” (1913) という詩を発表した。このエッセイや詩は、ホイットマンとパウンドとの関りを論じる時に、よく引き合いらし出される。これらの中でパウンドは、ホイットマンについて何を言おうとしたのだろうか。作品“*A Pact*”は全部で九行のもので、先ず全体を引いてみよう。

I make a pact with you, Walt Whitman—
 I have detested you long enough.
 I come to you as a grown child
 Who has had a pig-headed father;
 I am old enough now to make friends.
 It was you that broke the new wood,
 Now is a time for carving.
 We have one sap and one root—
 Let there be commerce between us.

第一にパウンドは、ホイットマンへの嫌悪の情を露骨に示している。先のエッセイでは、ホイットマンは「粗野」であり、「胸がわるくなるような存在」、「この上なく嫌悪の情を起させる人物」であるとされている。ホイットマンに対しては、およそ、いとわしい、おぞましいといった感じの形容詞が、パウンドの側から投げかけられているのである。

パウンドはつとに、ブラウニング、プロヴァンス詩、ロッセティなどに傾倒していたのだから、パウンドのホイットマンへの嫌悪の情は、十分すぎる位理解できる。パウンドは、ホイットマンが詩の形成面での技能を欠いていること、文化について「偏狭な概念」(provincial conception)を持っていることを嘆かわしく思っていた。これは、パウンドの内面での、パール・フェイスによるレッド・スキンへの反発とも言えるだろう。作品“*A Pact*”において、パウンドはホイットマンに対し、“*I have detested you long enough,*” (1.2)と言っている。パウンドにとって、もつと気心の合った、文化意識の上での祖先は、自ら言うように、ダンテ、シェークスピア、テオクリトス、ヴィヨンなどであった。その意味では、パウンドがアメリカを去ってイギリス、ヨーロッパへ渡ったのは、T・S・エリオットやH・Dの場合と同じように、必然的な行為であったと言える。

第二に、けれどもパウンドは、ロンドンにおいて内なるホイットマンを意識せざるを得なくなる。パウンドのエッセイや詩には、彼のアンビヴァレンスといった感情がよく示されている。パウンドはエッセイで次の内容のことを言っている。

ホイットマンの「粗野」はたしかに「いとうべき悪臭」だ。しかしそれがアメリカなのだ。

ホイットマンは、「この上なく嫌悪の情を催させる不愉快な存在」だ。しかし彼は自らの使命を成就している。

私はホイットマンの詩を苦痛なしに読むことはできない。それなのに私があることについて書く時、自分がホイットマンのリズムを使っていることに気付くのだ。

つまりパウンドにとって、ホイットマンはたしかにいうべき存在ではあったが、それにも拘らずホイットマンの作品にある、アメリカと、それを伝えようとする使命感、新しい詩のリズム……をパウンドは必要としたのである。イギリスにおいての青年パウンドの成長が、彼の内面にホイットマンを呼び起こすことになったのか。あるいは成長とまではゆかないにしても、アメリカ人パウンドは、たとえ知性や詩的感受性の面でホイットマンに反発しても、自らの血肉や意識の底にホイットマンを意識しないわけにはゆかなかったのである。詩人が自らの発生源から離れることはきわめてむずかしいことであり、離脱に当たっての告白や宣言は、ある意味で詩人の、発生源への執着を示す。イード・フォルソム (Ed Folsom) によると、作品“A Pact”では、「迷う息子」(a lost son)であったパウンドが、何とかがまんできるようになった郷里の父親の所へ意識の上でもどってゆく情況が、描かれているということである。¹⁾ 文化的に辺境であったアメリカと、本家イギリス(あるいはヨーロッパ)との間の断層に悩んだのは、もちろんパウンドが始めてでなく、十九世紀には「ハーバードの詩人たち」とか、コンコード・グループの文人たちとか、少なからぬ知識人が伝統のないアメリカに苦しんでいる。

パウンドの伝統や文化についての考えは、ボストンの知的貴族たちに近かったようである。そのパウンドが、自分たちと異質のホイットマンを、唯一のアメリカ詩人と見なしたのは大切なことのように思われる。ヒュー・ホワイトメイヤー (Hugh Witemeyer) によれば、パウンドは先のエッセイで、彼以前のアメリカの詩人ではホイットマンのみを唯一の“spiritual father”と見なし、この“spiritual father”との関りを明かにすることを追求したのだという。²⁾

パウンドは、ホイットマンの詩における「寛容で希望にみち、明らかにアメリカ的なメッセージ」に感銘を受けた。パウンドは、「私のメッセージの重要な部分はアメリカの樹液と繊維からとられているが、それはホイットマンのメッセージと同じである」と書いている。ホワイトメイヤーによると、パウンドはホイットマンと同じくアメリカという「系統樹」(family tree)に属し、そこから生命に必要な樹液と繊維を得たのであり、またパウンドのメタファーは、ホイットマンの二つの気に入りのメタファーである「植物」と「裸」に共鳴しているということである。パウンドはホイットマンを通して自らの内部にあるネイティブなものを蘇らせ、イマジズムからヴォーティシズム (Vorticism)へと進んでいったように思われる。

但し、作品“*A Pact*”において、パウンドのホイットマンに対する「和解」が成立したと見るのは、行き過ぎであろう。

先の作品の最後の行、*“Let there be commerce between us,”*が示すように、ここでパウンドがホイットマンとの間に設定しようとしているのは、“commerce”という関係である。フォルソムに於くと、commerceとは二つの異質なものの間での「交易関係」なのであり、そうだとすると、二人の間にはある意味で乾いた関係が成立したに過ぎないことになる。同時に“*pact*”という語にも同様の見方ができるとすれば、この作品に示された意識を、仲直りによるつきあいの再開といった、理念を超えた情的な和解と受けとっては、実態から離れたことになろう。「*を迷う息子*」であったパウンドと、「つむじ曲りのおやじ」であるホイットマンとの間には、やはり一線が画されていたと見るのが妥当であろう。パウンドのホイットマンへの異和感はその程容易にときほぐされるものではなかったのである。

ところで、パウンドが“A Pact”を発表してから四十二年後の一九五五年に、ビート派を代表するギンズバーグは、“A Supermarket in California”という詩を発表し、ここでホイットマンに“dear father”(1. 13)と呼びかけている。ギンズバーグはパウンドより四十一年後に生れているから、この二人の詩人は約四十年を隔て、ほぼ同じ位の年齢（パウンド二十八歳、ギンズバーグ二十九歳）で、「ホイットマン」の名の出でくる詩を発表し、それぞれに詩の中でホイットマンを「父」と呼んでいることになる。但し、これらの詩を書いた場所は、パウンドの場合はイギリスであり、ギンズバーグの方はアメリカ西海岸であつて、アメリカ東部を軸とすると、東西に分れているのである。

作品“A Supermarket in California”では、「私」は、カリフォルニアのスーパーマーケットでホイットマンの姿を見ることがなつてゐる。

What thoughts I have of you tonight, Walt Whitman, for I walked
down the sidestreets under the trees with a headache self-conscious looking
at the full moon.

(7. 1)

何故カリフォルニアでホイットマンが出てくるのか？それはむしろ、カリフォルニアを行くギンズバーグの内部にホイットマンが深く根を下していたからだろうが、同時に西部がホイットマンの求めた世界であつたからでもある。

ホイットマンとギンズバーグは、出身地や意識の上で共通する所がある。ホイットマンはニューヨーク州ロング・アイランドの出身であり、ニューヨークをこよなく愛したが、開けゆく西部に新しい力を見出だそうとした。

他方ギンズバーグは、ニュージャーシ州パターソン (Paterson) の出身で、ホイットマンと同じく東海岸の出であるが、ビートの運動のために西海岸を必要とし、この詩もパークレーで作られている。

スーパーマーケットは、さまざまの所から送られてきた品物が、その性質によって分類され、きれぎれの状態等で価物として並べられている所であり、それ自体、いかにもアメリカ的、あるいは西部新開地的なものと言えよう。それは又、ホイットマンのカタログ・スタイルと通うものを持っている。

けれども、この「スーパーマーケット」の世界は、ホイットマンの『草の葉』 (*Leaves of Grass*, 1855-1892) とは異質な所にある。

In my hungry fatigue, and shopping for images, I went into the neon
fruit supermarket, dreaming of your enumerations!.

(L. 2)

ホイットマンがカタログ・スタイルを用いて、眼前に展開する新世界のものの躍動をとらえたのに対し、ギンズバーグの「イメージの買物」は、“In my hungry fatigue” といった内的状況で行われ、ものにはすでに躍動のおもむきがない。

このようなスーパーマーケットにホイットマンはどのような姿で現れるか?

I saw you, Walt Whitman, childless, lonely old grubber, poking
among the meats in the refrigerator and eyeing the grocery boys.

I heard you asking questions of each: Who killed the pork chops?

What price bananas? Are you my Angel?

(11. 4-5)

ここではホイットマンは、*“childless, lonely old grubber”* といふように、孤独な姿で描かれており、公道を闊歩する、何物にもとらわれない loafer の趣はそこにはない。

このようなホイットマンの孤独な姿は、右の引用部分の前、つまり第三行の、

What peaches and what penumbras!
Whole families shopping at
night! Asles full of husbands!
Wives in the avocados, babies in the
tomatoes! — and you, Garcia Lorca,
what were you doing down by the
watermelons?

(1. 3)

といった家族絵出の買物情景と対照的である。

つまり、ギンズバーグにより、*“dear father”* と呼ばれているホイットマンは、現実の生活では、人の父たり得なかった人物であり、そのゆえにまた、ギンズバーグの心情と重なる側面を持っていたのであろう。

ホイットマンには、両親が作った家族はあっても、自分が結婚して作った家族はなかった。デイヴィッド・キヤヴィッチ (David Cavitch) によれば、ホイットマンは一八五〇年代初期に、孤独や敗北を伴う外部世界での活動を断念し、母親のパートナーとして、自分が父親に代って六人の弟妹の「父」としての役割を演じることを願ったという。何を以てホイットマンが外部世界での活動を断念したと見るのかは、疑問の残る所であるが、キ

ヤヴィッチは更に、ホイットマンの伝記上の有名な問題についても次のような解釈を下す。

すなわち、ホイットマンは後に、自分には六人の子供が居ると嘘をついた。が、これはホイットマンが六人の弟妹の「父」でありたいと願ったことの反映であり、このようなホイットマンの内部に閉じこもる性癖は、詩人の *autoeroticism* や同性愛と関りがある……⁸⁾

「父」であることを願ったホイットマンが、現実には父たり得ず、しかも後世のアメリカ詩人によって「父」と呼ばれることは面白いが、ホモセクシュアルな傾向と、父母との関係ということで、ホイットマンとギンズバーグには似た所がある。

ホイットマンの父は、ニューヨーク近郊の知的な活力を持った農民、職人、ラディカル・デモクラットであり、ホイットマンはこの父から深い影響を受けたと思われるのに、自らは父についてのよい思い出を語っていない。父と息子の対立というのは、詩人や作家の作品や伝記でよく描かれることではあるが、ホイットマンの場合も、その父とはかなりの点で折り合ぬ所があったようである。

このようなホイットマンは生涯母親を熱愛したのだが、ギンズバーグもまた、詩人である父ルイス・ギンズバーグ (Louis Ginsberg) とは折り合いがわるく、母ネイオミ (Naomi) を熱愛し、ホモセクシュアルな性癖の持ち主であった。

パウンドの場合と同じように、ギンズバーグはホイットマンを通して「アメリカ」を見つめた。が、パウンドにとつて、ホイットマンがいくべき存在であったにしても、ともかくもホイットマンは、「つむじ曲りのおやじ」であり、精神上的の父として、堅固な存在だった。パウンドにとつて、離れてきたアメリカは海の彼方に、しかしたしかな実在として存在したのである。

それに対し、ギンズバーグのホイットマンは、始めからさまよえる「父」であり、ギンズバーグは、身はアメリカにありながら、現実のアメリカは、彼があるべきものと夢みているアメリカとはかなり異質の、安定性を欠いた存在になってしまっていた。

Will we stroll dreaming of the lost America of love past blue
automobiles in driveways, home to our silent cottage?

(L. 11)

“blue automobiles in driveways”は繁栄するアメリカのもたらしたものだだろうが、それに反発するものとして、ホイットマンの集った“our silent cottage”が対照的に存在するのだだろう。いずれにしても詩人の眼前にあるのは“the lost America of love”なのである。

ギンズバーグはその講演において、ホイットマンが求めた「愛」について語っている。ギンズバーグによると、ホイットマンの「愛」の手がかりとなるものはデモクラシーであり、終局的には「仲間同志の愛」(“The Love of Comrades”)という意味であった。

「仲間同志の愛」とは何か？ギンズバーグによれば、それは男同志の、女同志の、あるいは男女の愛であるが、仲間の間には、デモクラシーを基盤とした「自然なやわらかさ」(spontaneous tenderness)があるべきだといっている。⁴⁾ “spontaneous”というのはホイットマンの好んだ語であるが、外見上の繁栄の陰にアメリカが失っているゆくもの、愛、やさしさ……を思いながら、ギンズバーグはレテの黒い河を渡る以前のホイットマンが、その生涯の最後にどのようなアメリカを見たかと問うているのである。

Ah, dear father, graybeard, lonely old courage-teacher, what America
did you have when Charon quit poling his ferry and you got out on a
smoking bank and stood watching the boat disappear on the black waters
of Lethe?

(L. 12)

“dear father”という呼びかけの中には、ホイットマンの悩みと夢を共にしたギンズバーグの熱いおもいがこめられている。

ゴールウェイ・キネル (Galway Kinnell) は、ギンズバーグのことを、「ホイットマンを理解して彼と共通した音楽を現代の詩にもたらした唯一の人物」のように思われると言っているが、たしかに右の詩からは、ホイットマンを自らに重ね合わせたギンズバーグが感じとれるのである。

以上のように、パウンドはイギリスにおいて、ギンズバーグはアメリカ西海岸において、共にアメリカを求め、ホイットマンの中に「父」を見た。共に詩人として新しい飛躍を必要としていた時であり、そのような時には自らの発生基盤とその伝統の確認が必要となるのである。

けれどもアメリカ人の場合（とりわけ白人の場合）、彼らの伝統はヨーロッパ（あるいはイギリス）のものであり、その伝統は彼らの現実の発生基盤であるアメリカから生じたものではない。エマスンが、アメリカの精神的自立を説いたのは、裏を返せばそのような自立が現実にはきわめて困難であることを示していたと言えよう。まことにホイットマンの新しい詩に向かつての試みは、無謀とも言える冒険であったことが分る。

他方で、英詩の伝統に対するホイットマンの常軌を逸した試みが、今度はホイットマンを「アメリカの伝統」

の象徴的存在にしたのである。ホイットマンは伝統を否定することで、自らを新しい伝統の創造者にした。

パウンドが、「What I Feel About Walt Whitman」でとらえたアメリカは、切り開かれた「新しい森」であり、粗野で、文化的には偏狭なアメリカであった。それは若いパウンドには堪え難い文化不毛の地であったが、それにも拘らず、アメリカは形成されつつあるエネルギーとして実在した。ホイットマンはその頂点にあるものであり、先に述べたように、パウンドがホイットマンを唯一のアメリカ詩人と見なしたことは、ホイットマンを避けて通つてはアメリカの詩は考えられなかったことを示す。パウンドにとってホイットマンは、容易なじみ得ないが無視し得ぬ存在であり、従つてパウンドにおける「父」ホイットマンのイメージは、必ずしものびやかな感性の所産ではない。

他方、ギンズバーグの場合、作品“A Supermarket in California”におけるアメリカは、かつて存在した善のアメリカではなく、ホイットマンのメッセージもうつろに響きかねない現実のアメリカである。スーパーマーケットでとらえられているホイットマンは、一面で親しみやすい一体感の持てる存在ではあるが、同時に孤独で不安定な放浪者である。ホイットマンが抱いたアメリカ像はどのようなものであったか、それさえギンズバーグには定かでないように思われる。

本来「父」のイメージが、「創始者」(founding father)ないしは「万物の父」とか、あるいは支配、權威、戒律、知恵、伝統とかいったイメージを含むものであるとすれば、ギンズバーグの見た「父」ホイットマンは、甚だ父らしからぬ父ということになる。それはむしろ、ギンズバーグの放浪の道づれとでもいった存在であり、失われた愛のアメリカを求めてギンズバーグはホイットマンのゴーストと共に、カリフォルニアをさまようが、やがて一九六一年、インドへ向つて旅立つ。それはホイットマンの作品“Passage to India”(1863)との重なり

を意識させる行為であるが、ギンズバーグの内面に生き続ける「父」ホイットマンは、理念的にはとらえ難い、流動性、拡散性を持った、伝統の象徴にはふさわしからぬ存在であると言えるだろう。

アメリカ文学は、しばしば前代の文化伝統への反逆によって成長してきた。アメリカ・ルネッサンスは、イギリス文化に対する東部ニューイングランドの、アメリカ知識人の自立であり、シカゴ・ルネッサンスは、東部WASPの文化に対する中西部詩人の自立であり、ハーレム・ルネッサンスは、白人文化に対する黒人の反逆の萌芽であった。つまり特定の地域や人種が文化的自立の力を蓄えた時、前代の伝統に対して反逆して自己を主張する、それがアメリカの「伝統」なのであった。従ってそれは当初から安定性を欠いた、いわば「父」としての存在感の薄いものであったと言えるのである。伝統の創始者でありながら、揺れ動き、それだけ外部者には開放されている存在、それがアメリカの「父」にふさわしいのであり、そのような「父」にホイットマンが位置づけられているのである。

ギンズバーグの父はユダヤ系移民の詩人であり、母はロシア系移民である。つまりギンズバーグはWASPではないわけだが、WASP以外のアメリカ人が、「アメリカとは何か？」という問題に突き当たり、文化意識の上で「父」を求める時、しばしばホイットマン像が彼らの心中に浮かぶことも、ホイットマン評価史の上で見逃せない事実である。ニューイングランドの知的貴族から一定の距離を置いて成長したホイットマンは、ユダヤ系アメリカ人のアメリカ人からも、「父」として思い浮かべられる側面を持っていたのである。

ジューン・ジョーダン (June Jordan) の “For the Sake of a People's Poetry: Walt Whitman and the Rest of Us” (1980) とジョーハンソンは “In America The Father is white,” という書を出して始まっている⁶⁾。つまりアメリカでは「父」は白人にまわっていた。アメリカ黒人には母があって父はいないということにな

るのであろう。

ジョーダンによれば、既成のアメリカ文学には、エリートによる旧世界の概念が定着している。従って既存のアメリカの文化意識の中から、黒人の継承すべきアメリカを求めらば、それはホイットマンだということになるのだろう。ジョーダンはホイットマンを、“the pre-eminently American white father”と呼ぶのである。

もちろん黒人の文化意識の根底には、古代アフリカやアフリカの部族社会の文化が潜むであろう。けれどもアメリカ黒人にとっては、ラングストン・ヒューズ (Langston Hughes, 1902-1967) が言ったように、アフリカは余りにもあなたの存在である。アメリカ黒人にはアメリカの中で自らを解放するより外に生きる道がない。

かつて W・E・B・デュボイス (W.E.B. DuBois, 1868-1963) は、「アメリカ黒人は自分の二重性——アメリカ人であることと黒人であること——を常に感じている」(一九〇三)と書いたが、アメリカ黒人はこの二重性の意識に苦しむゆえに、いっそう「アメリカ」の像を求めるわけである。その際彼らの求めるアメリカが WASP のアメリカではないことは当然であろう。彼らにとってホイットマンが、“white” という限定つきでありながら、やはり「父」であるのは理解し得る。旧世界の文化理念から自立しようとしたのがホイットマンだからである。

アメリカとは何か？それはしばしば行われる問いかけであるが、アメリカはとらえ難く定かでない。従って混沌としてとらえ難く、拡散を許すホイットマンの像が、「父」(文字通りかっこつきの父)として、WASPの枠をこえたアメリカ人、とりわけマイノリティ・グループにも多様な形で現れるのは、ある意味で必然であるのかもしれない。

